

制作発表を手がかりとした学生の学びと成長 —表現技術と非認知能力に着目して—

西田 希、三森 桂子、おかもと みわこ
(人間学部子ども学科)

Learning and Growth of Students Through Production and Presentation : Focusing on Expressive Skills and Non-cognitive Abilities

Nozomi NISHIDA, Keiko MITSUMORI, Miwako OKAMOTO
(Department of Child Studies, Faculty of Human Sciences)

子ども学科特別行事である「まみむめめじろかきくけこども」はカリキュラムには取り入れられていない。そこで2019年度より学科行事のための企画力・実践力を身に付けることを目標とし、アクティビティを通しての表現方法を学ぶことをねらいとする「表現技術の基礎」が新設され、第1学年に設定された。

本研究では「表現技術を通じた専門性への向上」「同級生や先輩学生との関わりや協働から生まれる人間関係の変化」「制作発表に向けた想像性や創造性」「達成感や自信への繋がり」等の視点から、本科目を履修した学生の成長と学びについて検討をした。本活動は技術向上の視点、さらに非認知能力の視点からも学びと成長を明らかにすることができた。本科目は知識を蓄え、教養を身につけるといった一般的な科目と異なり、感性を豊かにする可能性のある科目である。今後の課題として、表現技術を通してより多角的に学生の学びと成長を促せる方法を検討していきたい。

キーワード：学び、表現技術、制作発表、非認知能力、保育者養成

はじめに

幼稚園教育要領および保育所保育指針に記載されている幼児の「表現」は、生涯に涉って学び続ける人間を涵養するための大切な基礎の一つである。保育者や保護者は子どもに寄り添って子どもの表現を見守り、受け止め、適切な環境を整えて対応を行うことが期待されている。さらに、「生きる」ということは活動することであり、子どもが表現する、あるいは表現されたものに触れる活動を支援することも、「生きる力」を培うことにもつながるのである。

2003年度より短期大学部として子ども学科は開設され、4年後の2007年度から目白大学に移行した。同時に保育士資格、幼稚園教諭一種免許状などの資

格取得を目指す学生を受け入れることとなった。資格取得には、専門知識だけではなく実践の場において主体的に動くことのできる質の高い保育士、教員の養成が望まれている。

1. 子ども学科特別行事「まみむめめじろかきくけこども」について

2004年度より子ども学科特別行事として「まみむめめじろかきくけこども」発表会を実施している。今年度で18度目の開催となるこの発表会は子ども学科の教育課程である領域「表現」の授業成果を総合的に発表することによって卒業後に幼児教育に携わる学生の資質向上を目的とする(おかもと, 2017)。領域「表現」とは音楽活動、造形活動、身

体活動と考えられるのが一般的である。「まみむめめじろかきくけこども」は学年の壁をなくした全学年参加型であり、全員がすべてにおいて自主的に行動を決定し、学生たち自身がこの行事のために考え動き、より良い学科行事にして行く制作発表を通じた活動である。2020年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響からオンデマンドで開催されたが、2019年度の活動状況は表1のとおりである。

表1 まみむめめじろ活動状況 (2019)

<p>(1) 班ごとの活動状況 役者班、音楽班、体育班、美術班、広報班5班に分かれて作業を行う。</p> <p>①役者班：オリジナル劇の台詞練習</p> <p>②音楽班：劇中で流れる音楽の作曲や会場内で演奏する曲の練習</p> <p>③体育班：1年生は前座として演技をし、3年生は劇の効果上げるためのダンスを行う</p> <p>④美術班：大道具班、小道具班、館内装飾班、衣装班の4つに分かれ制作作業</p> <p>⑤広報班：近隣の園や施設などで宣伝活動</p> <p>(2) 学年ごとの活動状況</p> <p>①1年生：秋学期のベシクセミナーの授業で、学科特別行事として制作作業と鑑賞会を3コマ使うがあとは自由意志で有志として参加をする。</p> <p>②2、3年生：有志として参加をする。実習や授業の関係から3年生から総リーダー1名を立て、全学年をまとめる。総リーダーのサポートでサブリーダーが付き、2年生と3年生の有志学生が1年生のリーダーとしてグループを取りまとめている。</p> <p>③4年生：卒業研究があるため本番3週間前に元役者班の少人数が有志となり、1年生とともに前座を演じる。</p>

この活動を通し保育現場に必要となる制作のための様々な素材を知り、その特性を生かした表現技術を身につけるきっかけになったことが考えられる。

2. 科目「表現技術の基礎」について

「まみむめめじろかきくけこども」は子ども学科特別行事として実施されカリキュラムには取り入れられていない。そこで2010年7月に実施された「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の一部改正に伴って、2019年度より学科行事のための企画力・実践力を身に付けることを目標とし、アクティビティを通しての表現方法を学ぶことをねらいとする「表現技術の基礎」が新設され、第1学年に設定された。授業のねらいと学生の学習目標、主な授業内容(表2～4)は以下の通りである。3名の教授者で担当し、教授者にはそれぞれ1名の学生サポートが付けられた。

表2 授業のねらい

<p>領域「表現」のねらいを達成するために、保育者は何をどう援助・指導するのが望ましいかを考えなくてはいけない。本講義では子ども学科特別行事のための企画力・実践力を身につけることを目標とし、アクティビティを通しての表現方法を学ぶ。音楽表現・造形表現・身体表現の観点から制作発表を行い、保育者に求められる感性と表現力とコミュニケーション能力の育成を高めることを目的とする。各担当者がオムニバス形式で講義を進める。</p>

表3 学生の学習目標

<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園指導要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における「表現」について説明できる。 ・表現力の発達を踏まえ、表現活動について理解できる。 ・アクティビティの捉え方や援助のあり方について、効果的な方法を考えることができる。 ・問題に対する解決策を提案できる力を身につける。 ・人間関係を構築しコミュニケーション能力の向上を図る。 ・表現活動を通じて創作活動の能力を培う。

・子ども学科特別行事などの行事を企画する能力を身につける。

表 4 主な授業内容

	第 1 回	オリエンテーション 制作テーマの発表
音楽表現	第 2 回	主題歌作り（作詞・作曲）BGM の構想
	第 3 回	主題歌の作成と演奏練習 主題歌の合奏・合唱編曲
	第 4 回	BGM の作成と演奏練習
	第 5 回	主題歌完成と録音記録 楽譜作成
	第 6 回	BGM 完成と録音記録 楽譜作成
	第 7 回	主題歌・BGM の仮発表
	造形表現	第 8 回
第 9 回		小道具の効果と制作
第 10 回		大道具の効果と制作
第 11 回		舞台衣装の効果と制作
第 12 回		背景画の効果と制作
第 13 回		全体的舞台美術の制作
身体表現	第 14 回	制作テーマの理解、テーマ音楽の理解、作品の大まかなイメージ
	第 15 回	隊形の種類、移動、変化、組み合わせについて
	第 16 回	作品の時間構成
	第 17 回	全体練習①
	第 18 回	全体練習②
	第 19 回	全体練習③
総合表現	第 20 回	音楽、造形、身体分野との総合練習①
	第 21 回	音楽、造形、身体分野との総合練習②
	第 22 回	音楽、造形、身体分野との総合練習③
	第 23 回	音楽、造形、身体分野との総合練習④
	第 24 回	音楽、造形、身体分野との総合練習⑤
	第 25 回	音楽、造形、身体分野との総合練習⑥
	第 26 回	音楽、造形、身体分野との総合練習⑦
	第 27 回	音楽、造形、身体分野との総合練習⑧
制作発表	第 28 回	パターン①による制作発表
	第 29 回	パターン②による制作発表
	第 30 回	パターン③による制作発表、表現技術のまとめ、自己評価

(1) 2019 年度の活動状況

2019 年度の履修者は 15 名、制作活動における題材は A 幼稚園における年長児作成の創作絵本とした。造形表現分野については衣装、背景画、小道具の制作を行った。音楽表現分野については曲作りを行い、身体表現分野は曲、衣装、背景画が完成したあとに行われた。テーマ音楽に基づき絵本に登場す

る動物をイメージして創作活動を行なった。制作発表は本学の大講堂で行われこれまでの練習成果を発表した。学生たちは人前で発表することの緊張と不安・恐怖、期待で満ち溢れている様子であった。学生たちは本番前にメイクを済ませ、衣装に着替えて舞台に立ち、制作発表時には照明を当て、これまで練習してきた成果を発表した。3 曲目途中で曲が止まるというアクシデントがあったが、役になりきり、演じきることを学生たちは優先した。本番という舞台上でのアクシデントにも関わらず演じきったという達成感と充実感は、学生自身の大きな力になったと考えられる。岡本（2017）は発表会を通しての学びにおいて、発表後に達成感や充実感を味わうことができていると述べている。当該行事についても同様であると考えられる。

(2) 2020 年度の活動状況

2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2020 年 4 月の緊急事態宣言の発令を受け社会・経済活動が制限されるとともに、感染拡大防止の観点並びに被験者・験者の安全を第一とし研究活動の延期・中止・縮小が余儀なくされてきた。よって本授業は遠隔授業（遠隔実技）で実施された。履修者は 18 名、授業形式はビデオ通話システム（Zoom）を用いた双方向型で行われた。制作発表における題材は昨年度と同様に A 幼稚園における年長児作成の創作絵本とした。課題提出の方法はどの表現分野においても撮影動画であった。音楽表現分野では昨年度に作曲されたものに作詞をすることが最終課題とされた。課題の一つは昨年度に作詞された歌の弾き歌い、あるいは独唱の動画であった。提出された動画は完成度の高いものが多かった。理由としては提出動画を何度も撮影することにより、自己の課題を改善する手段となったと考えられる。造形表現分野では配役されたイメージの衣装を個人で作成することが課題であった。学内施設が使用できないため、決められた予算で材料を揃えるところから課題となり、想像力に加え計画力や応用力を高める結果となった。身体表現分野では配役された「姿」や「動き」を模範となる映像を分析しながら作成した。撮影した自分自身の姿は改善を重ね、洗練された姿に変化をしていった。本来であれば本大学の講

堂での制作発表となるが、Zoomの同時画面を用いたグループ発表とした。発表までの練習はブレイクアウトセッション機能を用い、同じ配役やシーンごとのグループワークとした。ビデオセッション特有の画像、音のズレなどを考慮するように促し、各グループで練習を行なった。制作発表では衣装を着用したことによって、動作にしなやかさや力強さが加わり、歌には音量、抑揚などの変化が見られた。この衣装着用による変化は2019年度に対面で行われたときと同じであった。また画面を通じて緊張をしている様子がかがえた。どのような状況下であっても集大成である発表会を行うことは、学生にとって達成感と充実感が得られ、表現技術の向上として大きな意義があると考えられる。

3. 研究の概要

(1) 研究目的

本研究では2021年度の授業実践を振り返り、表現活動を通じた学生の学びと成長を明らかにすることを目的とする。2021年度は長期化する新型コロナウイルス感染拡大の影響により、対面授業と遠隔授業のハイブリッド型で授業が行われた。様々な活動制限の中にあつた学生たちにとって2019、2020年度と同様に制作活動は達成感や充実感をもたらしたのであろうか。振り返るうえでの問いとしては①自由選択科目である「表現技術の基礎」を履修したことは、学科特別行事への動機づけや参加意欲の向上として、どのように役に立ったのか②授業に参加したことで、大学生活におけるコミュニケーションに変化はみられたか③表現活動を通じた活動は何らかの達成感を得ることはできただろうか、を元にアンケート調査を通して検証をしていく。制作発表における題材は昨年度と同様にA幼稚園における年長児作成の創作絵本とした。

(2) 調査対象及び調査期間

本学子ども学科に所属する「科目表現技術の基礎」履修者で、研究の同意が得られた27名を対象とした。本調査は2021年10月に実施した。予備調査として「『まみむめめじろかきくけこども』をどのように知りましたか」の質問では、ホームページ、入試案内、パンフレット、オープンキャンパス等の受

験前は25名(96.1%)、AO入試合格後の課題の受験後は1名(3.8%)であった。回答者の中には「本学を受験した理由」との記載もあった。

(3) 調査内容・分析方法

調査対象者には自己評価を目的とした自由記述による質問紙調査を行った。実施は30回目(最終授業)終了後に行う予定であったが、緊急事態宣言発令の影響から9月に予定をされていた制作発表が11月以降に延期になったため、27回目の授業終了後に行った。本研究ではアンケート調査の結果を分析することから、科目「表現技術の基礎」を振り返り、調査対象者にどのような影響があつたのかについて実施した。自由記述の回答は類似する記述内容をKJ法によって分類して分析を行った。

(4) 倫理的配慮

本研究は目白大学人文社会科学系研究倫理審査委員会の承認(21人-027)を得て実施した。調査対象者に対し研究の目的、調査方法を口頭で説明を行い、本研究へ協力するか否かについては、自由意志によるものとし、研究協力に同意しない場合でも成績には影響がないことに加え、対象者が特定できないような項目になっていることを口頭で説明をした。その後、質問紙を配布し、研究に同意をしたもののみ提出をしてもらった。

4. 結果

質問紙調査の内容は先述した問いを元にして作成した。参加学生27名中、提出された26名を有効回答として扱った。質問紙調査での質問項目と回答は以下の通りである。

(1) 履修理由と学科特別行事の関連について

「『表現技術の基礎』を履修した理由はなんですか」の質問項目に対して「その理由」を調査した結果、「『まみむめめじろ』の原点ということを知り、そして、音楽、造形、表現の3つのを全て学ぶことができるというカリキュラムに魅力を感じたから」「入学前から『まみむめめじろ』に興味があり、表現技術の基礎ではまみむめめじろに直接的に関わることができるので履修しようと思った」「『まみむめめじ

るかきくけこども』の行事の時にこの授業を履修することで、1つでも多くの案を出すことができ、自分も行事に積極的に参加できるのではないかと思ったから」など「まみむめめじろ」が履修理由となっている意見が12名あった。

また「遠隔授業が多く、人と交流することが少なかったため、交友を増やすため」「クラスの違う子達と一緒に友達を作ることが出来るのではないかと思ったから」「コロナ禍で大学内の知り合いも少なかったので、交友関係も広げることが出来るかなという挑戦の気持ちもあった」など人間関係の形成を期待する回答もあった。

(2) 大学生活での人間関係の変化について

『『表現技術の基礎』を履修して大学生活での人間関係に変化はありましたか。具体的にどのような場面でそのように思いましたか。』の質問項目に対して回答者全員から肯定的な回答が得られた。具体的な場面としては「今まで話したこと無かった子とも話すようになった」「様々なクラスの人と友達になれた」「もともと仲が良く一緒に履修した子たちとより仲が深まったのはもちろんだが、授業内でグループ活動を共にする子たちとも授業を重ねるごとに距離がちかまっていき人間関係の幅がとて広がった」「交友関係の幅が広がった」「この授業以外の場面で会話をすることが増えた」など同級生に対しての回答が24名あった。

授業時にサポートとして先輩学生が授業に参加をしたことから「先輩からのアドバイスを受け一緒に作業をしたことで、先輩方と良好の関係を築くことができ、普通の授業ではなかなかできないことが体験できた」の回答もあった。さらに「元々自分から話かけに行くのが苦手な一部友達としか話せなかったのだが、グループなどがあるため友達ができ、先輩との交流も広がった」「この授業を通してコミュニケーション能力が上がった」とのコミュニケーション能力向上を示唆する意見もあった。

(3) 制作活動を通じた達成感や自信について

「学生同士で作品を作り上げた時に、何か達成感を感じることはできましたか。また、自分の自信に繋がるような新しい発見はありましたか。具体的に

どのような場面でそのように思いましたか。』の質問項目に対して、回答者全員から「できた、あった、感じる事ができた」など肯定的な回答が24名あった。あげられた具体的な場面としては「グループごとに曲を作る際、1人ひとりが考えた歌詞を基に少しずつ合わせて1つの歌詞を作ることができた時は、自分たちでも歌詞を作れるものと達成感を感じた」「曲の振付を考えて、皆で踊って、だんだん完成に近づいていく様子を動画で見て達成感を感じた」「みんなで大きな絵を描き終えた際に、達成感を感じた」「ダンス、衣装、楽曲それぞれで何人も人のアドバイスを取り入れ、保育においての良い表現方法を学びながら試行錯誤を繰り返していたため、完成した際には達成感を感じた」など造形、音楽、身体各場面があげられた。

また「衣装で帽子を作り、友達、先輩、先生に褒めてもらった時に達成感を感じることができた」「自分が工夫して作った衣装を周りのみんなが褒めてくれた時、時間をかけて作ってよかったととても達成感を感じた」「楽曲を発表した際に先生やグループの仲間から曲の構成を評価していただき、自信に繋がった」など他者から評価を受けた場面が回答された。

(4) 学科特別行事への参加意欲について

緊急事態宣言の影響で制作発表会が学科特別行事開催以降に延期となったため、質問項目を「制作発表会を終えて」から「この科目を履修して」に文言を変更した。

「この科目を履修して学科特別行事（桐和祭、まみむめめじろかきくけこども）のどのような場面で活かしたいと思いますか。具体的にどのような場面でそのように思いましたか。』の質問項目に対して、「作業、演じる時など様々な分野に活用していきたい」「この授業で学んだ、衣装や小物の作り方や、提案をする場面で活かしたいと思った。また、身体表現の場面でも学んだことを活かして最高の行事にしたい」「衣装、歌、ダンスすべてにおいて今後には生かせる技術や能力を身に付けることができたが、特に衣装に関してはデザインする能力やセンスを今後の行事に活かしたいと感じた」等の造形、音楽、身体を総合的に捉えた回答が7名あった。

具体的な場面に対しては「振り付けのコツや、役割分担の方法」「小物や衣装の工夫の仕方やデザインについて」「小道具を作るときの段ボールのつなげ方や水のりでの画用紙のくっつけ方」「テーマ設定や方針を決定する場面」「ダンスの振付や構成を考えている場面」「必要な音を考える際に楽器を工夫したり、音を考えたりしたい」など技術的な回答やリーダー的立場での回答が17名と多くあった。

5. 考察

(1) 履修への学科特別行事の影響について

本科目は自由選択科目となっている。科目の特性上1コマ90分で一度の講義を行うことが難しいため集中講義で行い、教場は造形室、音楽室、体育館等の特殊教室での開講となる。このことから通常時間帯で講義をすることは困難であり、変則的ではあるが土曜日や長期期間中に講義を行う。よって学生にとっては履修しにくい科目と考えられる中で、微増ではあるが年々履修人数が増えている。

履修理由については先述したように「この授業はまみむめの原点である」「まみむめめじろに興味があった」「まみむめに似ている授業」「まみむめに繋がる」等、「まみむめめじろ」に関連する記述が多くみられた。予備調査結果からも分かる通り、進路選択での学科特別行事の存在は大きいことが分かる。さらに入学前教育プログラムの学科特別行事観覧で、一層学科行事に対する興味が強くなるようである。「保育者を目指すにあたって制作やダンス、歌などを学びたかった」「将来の役に立つと思った」「将来、子どもたちと関わるうえで良い経験になると思った」という保育の専門職として資質・能力についての回答もあった。音楽表現（歌を歌う、楽器で演奏する等）、造形表現（衣装を作る、背景を描く等）、身体表現（イメージを動きにする、演じる等）の経験は保育・教育現場でも必要な要素であることから、保育者としての学びの場として捉えたようである。

(2) 人間関係の変化について

同級生との友人関係、先輩学生との関係の変化について肯定的な回答が非常に多かった。ネット社会の影響等の現代社会特有の問題はあるが、現代の若

者は友達とのコミュニケーションを行う中で、傷つけ合うことを避けて表面的な付き合いにとどまり、気遣いながら友人関係を維持していこうとする傾向がある。(向出, 2020)。しかし望ましい人間関係を構築するには「現実に関わることが可能な存在としての友人をもつことが、青年期における自己の安定に重要な役割を果たす」と述べている(久米, 2001)。新型コロナウイルス感染の影響から遠隔授業が推奨されるなかで、本科目は演習科目の授業形態から対面授業が許可された。このことから「今までオンラインでしか関われなかった人も対面で関わることができた」「学校に行く授業が少ない中、履修していなければ関わることがなかったような先輩や同級生と関わるきっかけになった。」「オンライン授業で友達ができるか不安でしたが、話したことはないことたくさん授業を通して、コミュニケーションを取ることができて交流の幅が広がった」との回答は、友人と実際に関わることでできる直接的なコミュニケーションの重要性を実感したようである。また山崎(2015)は「集団への歌唱やダンスでは、他者に注目をしつつ、他者の動きや発声を同期させていくことが共感性を高めた可能性がある」ことから、本科目の特性がよい影響を及ぼしたと考えられる。

(3) 達成感や自信の形成について

達成感を得られた場面については「衣装、ダンス、曲を作って最初は不安だったけど、出来上がった時」「曲の振付がだんだん出来上がっていく時」「自分の想像していた物、自分作りたかった物を作ることができた時」など創作した作品が完成したときの回答が非常に多かった。本来の到達点は制作発表であるが、コロナ禍の影響から現時点ではできてない。このことから目標を「作品の完成」と捉え、達成感に繋がったと考えられる。また「友達や先輩方と助け合って作品を作り上げた事」「学生同士で協力できたので」「共同で制作したダンスはもちろん、衣装や個々での楽曲をアドバイスし合って完成した際」など同級生や先輩学生との活動を通しての回答も多かった。制作の過程では、同級生や先輩学生との想像的あるいは想像的な協働活動が不可欠である。過程では思うように進まない場面もあったはずであ

る。そのような活動の中で作り上げたからこそ、達成感を強く得られたと考えられる。自信が形成に繋がった場面については「背景を書いている時に先輩や友達から絵を褒められたので自信に繋がった」「ダンスの授業では自分オリジナルの振付をみんながほめて使ってくれたので、創作ダンスの時間は自信をもって発言できた」「作ったものをみんながとても良いと言ってもらえたときに自信がついた」「笑顔で取り組んで周りの人に褒められた時」など「褒められた時」の回答が多かった。対話において褒めることは重要である。褒めることで相手が心を開き、話が弾み、その後の人間関係が円滑になることが期待される（大西ら，2019）。「褒められた」ことは自信の形成のきっかけになり、さらに「活動を共にする同級生」から「大切な仲間」として認識が変化すると推察される。

(4) 科目「表現技術の基礎」を通じた学生の学びと成長について

表1の通り「まみむめめじろ」は各表現分野に分かれて班ごとに制作を行う。班分けの傾向として、個人の希望を最優先にし、班への所属が決定されている。希望を最優先にすることは、自身の得意な分野や興味のある分野から班を選択しているようである。選択した分野に関しては活動により変容的学びが期待できるが、他の分野に関しての学ぶ機会がない可能性がある。「音楽、造形、身体表現の3つで活かしていきたい」など表現を総合的に捉えた回答が多く見られた。これらの記述から表現を多面的に捉え、学科行事に対するモチベーションが伺える。例年の学科特別行事は「個々の班がそれぞれに活動を始め、最終的に総合発表として合わせていく」過程であるが、今後は活動開始時から「集団しての総合発表」を意識した活動過程に大きく変化をすることが期待できる。

「履修していない1年生を引っ張っていけたら」「自ら率先して意見を出し、みんなを引っ張っていきけるような存在になることができれば」「制作の過程全てにおいて自分のアイデアを自分の作品に生かすだけでなく、作品全体に対して積極的に意見していくことや、何より誰かがメインになるのではなく全員が楽しめるようにみんなの声を聞き合うことを

大切にしていきたい」のようなリーダー的存在を意識する回答も多く見られた。リーダーシップとは教育現場で重要視されているヘックマンが言及した「非認知能力」である。OECDは「非認知能力」を社会情動的スキルととらえ「長期的目標の達成」「他者との協働」「感情を管理する能力」の3つに分けている（則近ら，2020）。リーダーシップは特にこの3つのスキルが重要視される。このリーダー的存在を意識する回答から学生にとっての学びと成長が伺える。

おわりに

本研究は「表現技術を通じた専門性への向上」「同級生や先輩学生との関わりや協働から生まれる人間関係の変化」「制作発表に向けた想像性や創造性」「達成感や自信への繋がり」等の視点から、科目「表現技術の基礎」を履修した学生の成長と学びについて検討をした。2021年度の活動事例から、本活動は技術向上の視点、さらに非認知能力の視点からも学びと成長を明らかにすることができた。

本科目は表現技術の基礎を総合的に培う目的の授業内容である。特殊性としては、個々の技術を経験させるのではなく、全ての技術を習得し向上させることである。学科特別行事はカリキュラムに含まれていないこと、そして大きな特色として「全て学生自身で作り上げる」という目的がある。このことから教員の立場は「見守り」になる。しかし技術面、創造面等の学生の発想には限界があり、新しい挑戦に対し苦悩している場面も少なからず見受けられた。昨年度よりも作品の完成度を上げたいと思うあまり、年をおうごとに装飾の質を求めすぎている傾向がある。このことは学生のプレッシャーとなり体力面、精神面に追い込まれてしまうことも少なくない。「表現技術の基礎」を1年生のカリキュラムに導入することによって、専門の教員から教育を受け、この教育を土台にしてほしいという願いのもとに授業が行われている。履修者全員が園児の作成した絵本から作詞作曲をし、登場人物から想像する衣装や小物の制作、制作した衣装や小物を身に付け音楽に合わせたダンスの振り付をする。そしてリハーサルの行ううえで制作をし直し、総合表現として完成させ舞台での実演となる。制作発表はこれか

らになるが、調査結果から授業のねらいに則った、個々の学生自身の想像力と創造力に関する能力が引き出せたのではないだろうか。

本大学の教育理念の中に「育てて送り出す」という社会的使命を掲げている。多様に変化する現代社会において、生き抜く力を持った人材育成を行っている。学生が入学した時から、どのように育て、社会に送り出すかを教員の課題としている本学科は、専門性と実践力の発揮できる感性豊かで質の高い幼児教育者の育成を目指している。科目「表現技術の基礎」は知識を蓄え、教養を身につけるといった一般的な科目と異なり、感性を豊かにする可能性のある科目である。今後の課題として、表現技術を通してより多角的に学生の学びと成長を促せる方法を検討し、調査を重ねていきたい。

《引用文献》

- 池田裕恵編(2016)『保育内容「表現」からだで感じる・表す・伝える』, 杏林書院.
- 大西俊輝・柴田万里那・石井亮・富田準二・宮田章裕(2019)「対話における上手い褒め方のモデリングの基礎検討」, 『マルチメディア、分散、協調とモバイルシンポジウム』, 656.
- 岡本拡子・今井邦枝(2017)「総合的表現活動における学生の学び」, 『高崎健康福祉大学紀要』, 16, 68-70.
- おかもとみわこ(2017)「保育者養成校における主体的な学びの場 子ども学科行事『まみむめめじろ かきくけこども』」, 『人と教育』, 11, 11-12.
- 久米禎子(2001)「依存のあり方を通してみた青年期の友人関係: 自己の安定性との関連から」, 『京都大学大学院教育学研究科紀要』, 47, 488-499.
- 則近千尋・唐音啓・遠藤利彦(2020)『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 60, 117-119.
- 向出章子(2020)「ダンスの授業における大学生の心理的変容の検討—対人関係に着目して—」, 『教育学研究論集』, 15, 62.
- 無藤隆編(2018)『新訂<領域>表現』, 萌文書林.
- 無藤隆編(2017)『幼稚園教育要領まるわかりガイド』, チャイルド本社.
- 安村清美・中原篤徳・斉木美紀子(2010)「総合的な「表現」への取り組み I—保育者養成校における「保育内容表現」の現状と課題—」『田園調布学園大学紀要』, 5, 203.
- 山崎晃男「集団による歌唱・ダンス活動と向社会的特性との関係およびその教育的意義について」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』, 5, 35-42.
- (受付日:2021年10月31日、受理日:2022年1月17日)